関係性攻撃と心理社会的適応との関連 (21)

一高校生の関係性攻撃行動傾向・社会的情報処理・応答的行動の関連—

○関口雄一^{1,2}・櫻井茂男³・湯川進太郎³・大川一郎³・石隈利紀³・濱口佳和³

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²日本学術振興会・³筑波大学人間系)

キーワード：関係性攻撃・社会的情報処理モデル・関係性挑発場面

Relational aggression and psycho-social adjustment (21) :

The relation of high school student's relational aggression, social information processing, and reactive behavior

Yuichi SEKIGUCHI^{1,2}, Shigeo SAKURAI³, Shintaro YUKAWA³, Ichirou OHKAWA³, Toshinori ISHIKUMA³, and Yoshikazu HAMAGUCHI³

(¹Graduate School of Comprehensive human sciences, Tsukuba Univ., ²JSPS, ³Faculty of human sciences, Tsukuba Univ.)

Key Words: relational aggression・social information processing model・relational provocation situation

目 的

関係性攻撃 (relational aggression) は、「仲間関係を操作することにより、他者に危害を加えることを意図した攻撃行動」と定義され、関係操作、噂の流布、社会的排除などの種類があるとされてきた (Crick & Grotpeter, 1995)。濱口他 (2013) は、従来の関係性攻撃研究では、関係性攻撃の種類の相違が考慮されていないとして、高校生の関係性攻撃を「関係操作」、「無視」、「陰口」の3種類に分けてとらえる高校生用の多次元性関係性攻撃尺度を作成し、併存的妥当性と十分な信頼性を示している。これらの関係性攻撃に従事する傾向は、場面特殊的な認知である社会的情報処理を媒介として、他者との具体的な相互作用場面で実行される攻撃行動と間接的に関連を示すことが予測される。本研究では、高校生の関係性攻撃と、仲間による関係性挑発場面における被害者の社会的情報処理ならびに応答的行動との関連性を検討する。

方 法

1. 調査対象者：全国の高校1～3年生203名 (1年生男子20, 女子25; 2年生男子37, 女子40; 3年生男子31, 女子50)。
2. 調査内容：(1) 多次元性関係性攻撃尺度 (自記式高校生用)：関係操作、無視、陰口の3下位尺度計33項目、5件法 (濱口他, 2013)。(2) 関係性挑発場面における社会的情報処理・応答的行動質問紙：仲間からの無視、仲間はずれ、陰口といった関係性攻撃被害を示唆する、加害者の意図が曖昧な関係性挑発エピソードを2場面提示し、各エピソードで19項目の社会的情報処理変数 (解釈、感情、目標明確化、反応検索、反応評価) と6項目の応答的行動 (顕在性攻撃、関係性攻撃、主張行動) を測定、対応する変数をエピソード間で合計した。なお、情報処理変数間で評定の幅が異なるため、全項目を標準化してから分析を行った。(3) Buss-Perry 攻撃性質問紙：身

体的攻撃のみ7項目、5段階評定 (安藤他, 1999)。(4) 敵意的攻撃インベントリ：間接的攻撃10項目、5件法 (秦, 1990)。

結 果

社会的情報処理による媒介モデルを検証するために、Amos 21 を用いて共分散構造分析を行った。まず、関係性攻撃3下位尺度得点と身体的攻撃得点を第1水準として設定した。次に、社会的情報処理の4変数 (主張肯定評価、攻撃肯定評価、関係維持SIP、報復的SIP) を第2水準として設定した。この4変数に対して第1水準の全変数からのパスを引いた。最後に、2つの応答的行動 (報復的攻撃行動、主張的行動) を第3水準に設定し、第1水準、第2水準の全変数からパスを引いた。なお、関係性攻撃の各下位尺度得点と身体的攻撃得点の全てに相関を想定し、社会的情報処理と応答的行動の全てに誤差項を設定した。最初上述のモデルの適合度の検証から出発し、有意でなかったパスや相関を順次削除し、適合度が最適となるモデルを探索した。その結果、Figure 1 に示す結果を得た。モデルの適合度は GFI = .915, AGFI = .813, CFI = .903, RMSEA = .118 であった。

考 察

本研究の結果から高校生の関係性攻撃のうち、関係操作は直接効果のほか、攻撃肯定評価や報復的SIPを介して、報復的攻撃行動に正の関連を示すのに対し、無視は主張肯定評価を介して、関係性攻撃に負の関連を示すこと、また報復的SIPを介して負の関連を示すことなどの複雑な関連が明らかにされた。この結果から、今後は高校生の関係性攻撃の詳細な形態別の機能を検討する必要があると考えられる。

(本研究は日本学術振興会科研費補助金 (基盤研究(B) 課題番号 22330187) の助成により行われた。)

Figure 1 関係性攻撃・身体的攻撃、社会的情報処理、応答的行動のパスダイアグラム